

Jean *lui* a cassé sa vaisselle / le bras
にみられる与格について*

井 口 容 子

1. (1) は LECLÈRE (1978) が「拡大与格」と呼ぶ構文, (2) は「体の部分の所有者を表わす与格」を含む構文である。(間接目的語の代名詞, à+NP の両方を「与格」と呼ぶことにする.)

- (1) a. On *lui* a cassé sa vaisselle. (L)¹⁾
- b. Elle *lui* a tué sa femme. (K)
- c. Marie *lui* a bougé son lit. (L)
- (2) a. Jean *lui* a cassé le bras.
- b. Charles *lui* a tordu le bras.

拡大与格はその文が表わす行為によって何らかの影響を受ける人物(受益者もしくは被害者)を表わす。この用法にはかなり強い構文的制約が課せられており、ほとんどの例が直接目的語を伴った他動詞構文である。

- (3) a. **Sa femme lui est morte.* (Y)
b. **Son bébé lui a pleuré toute la nuit.*
c. **Le coq lui a chanté à trois heures du matin.*

自動詞の構文である(3a-c)に対する評価はいずれも「不可」である。ただ自動詞であっても次のような場合には許容される。

- (4) a. *Le chiot lui a pissé dans ses laitues.* (B)
b. *Les gosses lui ont gribouillé sur tous les murs.* (B)

これらの事実は次のことを示唆するものと思われる。拡大与格は動作の直接的な影響を受ける名詞句が文中に存在する場合にのみ許容されるのである。最も代表的なのは直接目的語の場合であるが、(4)の*ses laitues, tous les murs*のように、前置詞句に含まれる名詞の場合もある。

一方、体の部分の所有者を表わす与格の方は、かなり構文的に自由である。よくみられるのは(2)のような他動詞の構文であるが、次に示すように自動詞の例も多い。

- (5) a. *Les insectes lui couraient sur les jambes.* (K)
b. *La petite boule de neige lui a fondu sur l'épaule.*
c. *Des pierres lui tombaient sur la tête.* (B)
d. ?*La barbe lui pousse vite.* [可: 2, 疑: 1, 不可: 2]²⁾

2. この二つの用法の与格は、*à+NP* という連鎖よりも、代名詞の形をとった方が許容度が高いことが多い。

- (6) a. **Jean a cassé sa vaisselle à Marie.* [可: 0, 疑: 1, 不可: 4]
b. ?*Jean a cassé ces trois verres à Marie.* [可: 0, 疑: 2, 不可: 3]

- (7) a. **Le chiot a pissé dans ses laitues à Paul.* [可: 0, 疑: 0, 不可: 5]
b. ?*Le chiot a pissé dans les laitues à Paul.* [可: 1, 疑: 3, 不可: 1]

所有形容詞を含む(6a), (7a)の方がさらに悪いのは、BARNES (1985) が指摘するように、所有形容詞が同一の対象を指示する名詞に先行している、という構造的原因によるものと思われる。

体の部分の所有者を表わす与格の場合は、構文によって許容度に違いがみられる。

- (8) (?)*Jean a cassé / tordu le bras à Paul.*

体の部分の名詞 (*substantif de partie du corps*; 以下 pc 名詞と略記) が直接目的語の位置を占める構文のうち、(8) のような文に関しては、かなり評価が分かれる。KAYNE (1977) は *on a cassé le bras à ce garçon* に対して、*lui* や *de ce garçon* を用

いた文に比べれば僅かばかり不自然であるとの指摘を加えてはいるが、「可」の評価を与えている。筆者の調査の結果は[可: 1, 疑: 3, 不可: 1]であった。一方, (9) に対しては評価は高くなる。

(9) Elle lave les cheveux à Paul. [可: 4, 疑: 1, 不可: 0]

この違いはおそらく, (8) では à+NP は「被害者」であるのに対して, (9) ではむしろ「受益者」と解釈されやすいということに関係があるのではないかと、思われる。

(10) のように自動詞の構文で pc 名詞が状況補語に含まれる場合には許容度は低くなる。

(10) a. ?Les insectes couraient sur les jambes à Paul.

b. ?La petite boule de neige a fondu sur l'épaule à Marie.

評価はともに[可: 0, 疑: 3, 不可: 2]である。(11) のように pc 名詞が動作の直接的対象である場合にも評価は[可: 0, 疑: 3, 不可: 2]であった。

(11) ?Elle a tapé sur la tête à Paul.

(12) は pc 名詞が主語の例である。

(12) ?La barbe pousse vite à Paul. [可: 0, 疑: 2, 不可: 3]

成句的な (13) においては許容度はさらに低い。

(13) *La tête tourne à Paul. [可: 0, 疑: 1, 不可: 4]

cf. La tête lui tourne.

以上「拡大与格」と「体の部分の所有者を表わす与格」について、特に「構文」という側面に注目しながら分析してみた。この二つの用法の類似点と相違点をどのように文法の理論の中で位置付けていくか、今後の課題として興味深いところである。
(日本学術振興会特別研究員)

[注]

*) 本研究は平成二年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(特別研究員)), (課題番号01790113)の交付を受けて遂行したものである。

1) 例文の出典は以下の通りである。

B: BARNES (1985), K: KAYNE (1977),

L: LECLÈRE (1978), Y: 山田 (1985). 印のないものはインフォーマントによるものである。快く調査に応じて下さった方々に厚く御礼申し上げる。

2) []内はインフォーマントの評価の内訳を示す。

[引用文献]

BARNES, B. K. (1985): «A Functional Explanation of French Nonlexical Datives», in *Studies in Language* 9-2.

KAYNE, R.-S. (1977): *Syntaxe du français*, Seuil, Paris.

LECLÈRE, Ch. (1978): «Sur une classe de verbes datifs», *Langue Française*, 39.

山田博志 (1985): 「間接目的語について」, 『フランス語学の諸問題』, 三修社。